

夏播きサヤエンドウのパイプハウス利用における作期拡大

第1報 播種期と品種適応性

加賀屋博行・上村隆策・田村保男*・畠山順三**

(秋田県農業試験場・*秋田農業改良普及所・**秋田県農産園芸課)

The Extension of Cropping Season on Summer Sowing Edible Podded Pea by Plastic House

1. The seeding time and varietal differences of adaptability

Hiroyuki KAGAYA, Ryusaku UEMURA, Yasuo TAMURA*
and Junzo HATAKEYAMA**

(Akita Agricultural Experiment Station・*Akita Agricultural Extension Service Station・
**Agricultural Production and Horticultural Section of Akita Prefectural Government Office)

1 はじめに

秋田県におけるサヤエンドウの栽培は、その面積が昭和61年度で約150haに達しており、ここ数年安定的に推移している。産地は県中央部沿岸の本荘・由利地域が主体で、179戸が20.9haの販売向け面積を形成しており、次いで能代・山本地域及び大曲・仙北地域での生産が多い。

本県の作型としては春播き栽培と夏播き栽培が分化しており、春播き栽培は播種期が3月下旬から5月中旬、収穫期が6月上旬から8月上旬になり、夏播き栽培は7月中旬播きで収穫期が9月下旬から10月下旬となる。

このうち夏播き栽培は夏季冷涼な地域では有利な作型で、本県でも増加傾向にある。しかし、この作型は10月後半の低温のため品質や収量の低下が見られる場合がある。そこで県内に多数存在する水稻育苗ハウスなどの、パイプハウス利用による作期拡大と生産安定技術について、昭和61年度と62年度に検討した結果を報告する。

2 試験方法

(1) 試験区の構成

播種期と品種の組み合わせについて、昭和61年と62年の2回検討した(表-1, 表-2 参照)。

(2) 試験実施場所及び土壌条件

当場、細粒質灰色低地土

(3) 耕種概要

1) 供試パイプハウス： 間口5.4m, 奥行18m

2) パイプハウス被覆開始時期： 昭和61年～天井10月7日, 側面10月25日 昭和62年～天井9月7日, 側面10月15日

3) 栽植様式： 畦幅100cm, 株間20cm, 2粒播き1条, 白黒ダブルマルチ栽培

4) 施肥量(kg/a)： 基肥N, P₂O₅, K₂O 各1, 追肥N, K₂O 各1(昭和61年), 各0.5(昭和62年), 堆肥200, 苦土石灰10, ようりん5

3 試験結果

(1) 昭和61年度：(表-1 参照)

生育は30日絹莢と比べ夏浜, 笹舟, ニムラの三品種が草丈が低く半矮性であった。

播種から収穫までの所要日数は7月25日播種が最も短く,

表1 生育・収量及び障害発生状況(昭和61年度)

播種期	品 種	草丈(cm) 10月1日	播種～ 初収穫 (日)	収 穫 期 間 (月/日)	同日数 (日)	収 量 (個/m ²)			クキグサレ症株割合(%)		
						上 莢	(同比)	上物率 (%)	健 全	軽	甚
7月 25日	30日絹莢	157.0	36	8/30～11/13	75	89	(100)	55.5	0	20	80
	電光30日	175.0	34	8/28～11/5	70	83	(94)	68.9	0	40	60
	ニムラ	83.0	57	9/20～11/20	62	152	(166)	61.0	11	67	22
8月 5日	30日絹莢	151.0	54	9/28～12/5	69	218	(100)	70.8	0	38	62
	電光30日	145.5	54	9/28～12/1	65	116	(53)	60.9	0	33	67
	豊 成	130.0	88	11/1～12/3	33	38	(17)	73.5	34	44	22
	夏 浜	96.0	54	9/28～12/3	67	152	(70)	70.7	0	82	18
	笹 舟	70.5	61	10/5～12/1	58	83	(38)	58.1	0	50	50
	ニムラ	83.0	57	10/1～12/5	66	231	(106)	78.2	0	70	30
15日	30日絹莢	136.0	59	10/13～12/10	59	149	(100)	73.5	100	0	0
	電光30日	112.5	59	10/13～12/5	54	65	(43)	66.5	100	0	0
	ニムラ	61.0	64	10/18～12/5	49	94	(63)	75.7	100	0	0

播種期が遅くなるほど長かった。30日絹莢、電光30日を例に見ると、播種期が7月25日から8月5日へ10日長くなると収穫開始は1か月遅くなった。しかし収穫終りも1か月遅くなり収穫期間はほぼ同じとなった。

播種期による収穫個数は、8月5日播種が豊成を除く全品種で最も多収となった。

品種別の収穫個数は、7月25日播種ではニムラが多く、30日絹莢と電光30日は同じくらいでニムラより劣った。8月5日播種はニムラ、30日絹莢の順で、8月15日播種では30日絹莢が多収となった。

61年度は8月が高温のため、クキグサレ症の発生が多く収量の低下につながった。播種期別では7月25日播種、次いで8月5日播種に発生が多く、8月15日播種には見られなかった。品種では豊成に発生が少なく、ニムラも比較的安定していた。

したがって後期多収をねらう雨除け栽培では、播種期では8月5日が安定して高い収量をあげ、品種では30日絹莢が各播種期とも品質がよく、ニムラは莢の色がやや淡いものの、クキグサレ症の発生も少なく収量性に優れていた。

(2) 昭和62年度：(表-2参照)

播種期と品種について露地栽培と比較検討した。

播種期については、ハウス利用の場合、8月5日播種は8月12日播種と比べ、収穫開始が4～21日早く、収穫終りはほぼ同時期となるため、収穫期間が長く多収となった。

品種については、ハウス利用の8月5日播種において、子宝30日が特に10月後半の収量が極めて高く、その後も他品種より多収で経過し、総収量、上物率が最も優れた。次いで30日絹莢、電光30日が優れた。露地栽培においても同様に子宝30日が最も多収であった(表2)。

ハウス利用と露地栽培を比べると、8月5日、12日の両

表2 時期別収量と最終生育(昭和62年度)

場所	播種期	品 種	収 穫 期 間 (月/日)	9 月	10 月		11 月		合計(個/㎡)		上物率 (%)	一莢重 (g)	収 量 (kg/a)	草丈 (cm)
					上期	下期	上期	下期	良莢 (同左)					
ハ ウ ス	8 月 5 日	30日絹莢	9/12～11/25	85	266	148	63	10	572	145	78.0	2.43	139	331
		成 駒	9/17～11/20	25	158	122	28	0	333	129	62.8	1.61	54	314
		松島30日	9/ 9～12/ 2	68	178	109	46	17	418	120	75.2	2.53	106	288
		松島E系	9/ 9～12/ 2	45	123	82	38	17	305	90	68.2	2.60	79	320
		子宝30日	9/14～12/10	67	271	319	165	59	881	173	83.3	1.65	145	226
		電光30日	9/ 9～12/ 2	60	225	190	68	27	570	140	75.5	2.29	131	290
	12 月 5 日	30日絹莢	9/21～12/ 2	18	116	148	69	26	377	160	68.7			
		子宝30日	9/28～12/10	9	96	151	142	92	490	184	76.1			
露 地	8 月 5 日	30日絹莢	9/ 9～11/ 4	103	189	75	27	0	394	100	66.3			
		子宝30日	9/14～11/13	44	228	137	99	0	508	100	65.0			
		電光30日	9/14～11/ 4	60	232	93	21	0	406	100	67.1			
	12 月 5 日	30日絹莢	9/21～11/ 4	14	128	72	21	0	235	100	59.2			
		子宝30日	9/21～11/15	18	63	85	101	0	267	100	63.6			

播種期とも、ハウス利用では収穫期間が1か月ほど延長し、収量の多い8月5日播種でみると、収穫個数は子宝30日が73%，30日絹莢が45%，電光30日が40%の増収となった。

本年はクキグサレ症の発生がみられず、いずれも順調な生育であった。子宝30日は他品種と比べ草丈が低く、半矮性で、一莢重はやや小さいものの収穫個数が多く最も多収となった。

したがって61年度同様、播種期は8月5日が多収となった。品種は子宝30日が最も多収で、特に低温期の収量性が優れ、草丈も比較的低いことから有望とみられ、次いで30

日絹莢、電光30日も比較的安定していた。またハウス利用は露地栽培と比べ、収穫期間が1か月ほど延長し、上物率も高く品種により40～70%の増収がみられた。

4 ま と め

夏播きサヤエンドウの後期多収をねらいとしたパイプハウス利用による栽培は、播種適期が8月5日ころで、収穫期間が露地より1か月ほど延長し、40～70%の増収となった。品種は子宝30日絹莢が低温期の収量性がよく、半矮性であることから有望であった。